

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32617

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820042

研究課題名(和文) 中世後期クレタにおけるヴェネツィア人とギリシア人の「共生」の構築過程

研究課題名(英文) A Research of Making Symbiosis Process between Venetians and Greeks in Late Medieval Crete

研究代表者

高田 良太 (Takada, Ryota)

駒澤大学・文学部・講師

研究者番号：80632067

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：クレタ島では、13世紀から17世紀までの長きにわたってヴェネツィアが、ギリシア系住民を支配する状況が続いた。そうした支配＝被支配の関係の構築プロセスを1300年前後の政治・社会的状況に基づいて考察し、以下の2点を明らかにした。

一点目は、クレタ島の旧宗主国であるビザンツと、クレタとの関係の変化である。ビザンツは島内のギリシア系住民とのコネクションを保ちつつ、ヴェネツィアのクレタ領有を認める方策をとった。

二点目は、島内の変化である。13世紀末に台頭したギリシア系有力者のアレクシオス・カレルギスの介在によって、ギリシア系住民にヴェネツィアの意図する支配が理解され、平和が構築されることになった。

研究成果の概要(英文)：In Crete, Venetian local offices continued to subject Greeks from 13th till 17th century. The relationship constructing process between rulers (Venetians) and subjects (Greeks) is observed in this study, based on the political climate and social circumstances around 1300. This study has two main results.

First, relation between Crete and Byzantine empire, the former suzerain power, had changed. Byzantine emperors tried to keep communication with Greeks in the island, while admitted its dominion to Venetian Republic.

Secondly, the society in the island had changed. Last decades of 13th century, Alexios Calergis, a Greek magnate, got a power and mediate the relationship between Venetian local authority and Greeks in the intermediate region. In this result, Greeks understood exactly what regime Venetians intended to establish, so peace had finally realized.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：地中海史 イタリア史 ヴェネツィア ビザンツ クレタ島 共生社会

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は、これまでの研究において、クレタ島の港湾都市カンディアにおけるエスニシティの分離的共生関係について研究を進めてきた。さらに、都市の外の広い領域に目を向けたときに、支配者であるヴェネツィアと、被支配者であるギリシア人との関係がどのように形成されるのか、という問題への関心が生まれた。

(2) 境界域に焦点をあてた中世史研究は、日本においても世界的な潮流としても、盛んになりつつある。そのなかでも境界域を異なる文明が対立する地域としてではなく、共生する地域として捉えようとする研究が、地中海の他の地域においてなされており、同様の手法をクレタの史料におい援用することで、クレタ島における境界域の形成過程を浮かび上がらせることができると考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) 13世紀末から14世紀にかけてクレタにおいて、ヴェネツィアと山間部のギリシア系住民の共存関係がどのように形成されていったのかを、1299年4月の和平成立前後の政治・社会的状況の変化に着目して考察する。

(2) 和平関係締結の渦中であつたカレルギス家について、13世紀末から14世紀初頭にかけての経済活動や人間関係の特質を明らかにする

3. 研究の方法

(1) 15世紀の年代記作家デ・モナチスが作成した年代記と、13世紀後半にヴェネツィアと山間部のギリシア人のあいだで締結された和平条約、および1299年の和平条約に付されたクレタ総督からヴェネツィア元首に宛てた報告書の内容を素材として、1299年の和平締結のプロセスと、それに伴うヴェネツィアとギリシア人の関係の変化に注目して分析を行った。

(2) クレタ島では13世紀後半から公証人の活動が見られるようになり、数名の公証人の帳簿が断片的ではあるが残存している。本研究では、このなかで13世紀末から14世紀初頭にかけて作成された3点の公証人帳簿(ピエトロ・ピゾーロの1300年、1304-05年の帳簿、ベンベヌート・ダ・プレシャの1301-02年の帳簿、ステファノ・ボノの1303-04年の帳簿)に含まれるラテン語の契約書のうち、カレルギス家が関与する文書を分析して、世紀転換期にカレルギス家がどのような人間関係を取り結んでいたのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 13世紀におけるクレタ島を取り巻く国

際情勢の変化の帰結として、クレタ島はビザンツ帝国によって正式にヴェネツィアに割譲された。この点について、ビザンツ帝国からヴェネツィアに対して発給された、黄金印璽文書の文面を分析し、ビザンツからヴェネツィアへのクレタの領有権の委譲がどのような条件のもとでなされているのかを確認した。その結果、以下の2点を確認した。まず1点目としては、1268年以降、ビザンツ皇帝はヴェネツィアに対して繰り返し黄金印璽文書を発給するなかで、常にクレタの領有権をヴェネツィアに認めることとなっており、ヴェネツィア側にクレタの領有権があることについて、13世紀後半には両国の間での諒解ができていたことである。第2点目としては、ビザンツとヴェネツィアの間での約定には、クレタに住むビザンツ臣民が、ビザンツ皇帝の支配に服するために島を離れる自由が、ヴェネツィアによって尊重されるべきであると述べられているということである。いわゆるビザンツシンパのギリシア人の離島権がここでは設定されている。

以上の2点から明らかになるのは、ヴェネツィアとビザンツの外交交渉のなかで、クレタ島が境界域として設定されたことである。土地の領有権は確かにヴェネツィアに認められることになったが、島内に住む人の帰属(とりわけギリシア正教徒やギリシア語話者の住民)は曖昧なままにされた。ビザンツ帝国はこうした人々との結びつきを通じて、島内への影響力をある程度留保することにも成功した。

以上の点については、書籍において成果として公表した。

(2) 13世紀に山間部のギリシア人によって繰り返された対ヴェネツィア反乱は、一つの勢力がヴェネツィアと和平を結んでも、別の勢力が主導して反乱を起こすというように、情勢が安定化する兆しを見ることがなかった。この理由のひとつは、ビザンツ側のクレタ奪還の運動に、山間部のギリシア人が呼応していたということがあるが、もうひとつの理由は、ヴェネツィアの描く「支配」のイメージと、山間部のギリシア人の描く「支配」のイメージのズレにあったと思われる。ヴェネツィアは、文官が駐在・巡回して中央政府と在地社会のなかだちをするような、ビザンツ的支配体制ではなく、アルコンと呼ばれるギリシア人有力名望家を地域の代表者として指名して、行政・司法・教会管理などの地域社会の利害調整の全てを任せようとした。このヴェネツィア側の意図は長く理解されず、些細な事件から個別の有力者とヴェネツィアとの対立関係が深刻化し、反乱に至っていた。アレクシオス・カレルギスはこうしたヴェネツィア側の意図をよく理解していたと思われる。アレクシオスは地域内外のギリシア人の協力をとりつけて反乱を起こ

しており、その中には他の地域の名望家、正教会系修道院、農民、モネンヴァシアの傭兵などが含まれていた。そしてこうした人間関係は、1299年の和平以降も基本的に維持されたと思われる。1299年の和平における重要事項は、捕虜交換のかたちをとったモネンヴァシア傭兵の解放、ならびにアレクシオスの支配地域の教会について、ローマ・カトリックの管轄下ではなくアレクシオス自身の管轄下にあることが認められているという点にあった。

アレクシオスが1300年以降、地域の教会の管轄権を実際に行使していたことを示す史料としては、1304年のピエトロ・ピゾーロの公証人文書があり、その中ではアレクシオスの支配地域であるミュロポタモスの参事会がアレクシオスとの間に教区の管轄権の賃借をしている例があげられる。また、年代記が紹介する1302年のエピソードでも、反乱を起こそうギリシア人に対して主導的な立場をとっていたことも示される。アレクシオスは、地域のギリシア人の指導者として、山間地を自律性を維持していくという、和平協約に見られる、ヴェネツィアがアレクシオスに対して期待していた役割の、ある程度、忠実な遂行者となっていたことを裏付けている。

以上の点については、書籍、雑誌論文、学会発表において成果として公表した。

(3) アレクシオスとヴェネツィアとの和平を支えたものは何であったのか。この点についても関連史料の分析からは、興味深い図式が浮かび上がってくる。まず、アレクシオスとクレタ総督は、少なくとも残存する史料が示す、和平締結以前の数ヶ月間は全く顔を合わせていない。また、クレタ総督はそもそもアレクシオスの所在さえも正確には把握していなかった可能性が高い。したがって、交渉は全て書簡によって進められた。また、有利によって運ぼうとする両者の思惑によって、何度も交渉は中断され、決裂の危機を迎えたことが、クレタ総督からヴェネツィア元首に宛てられた報告書の文面において示される。

この交渉を取り持ったのは、アンドレアスとヨハネスという、ヴェネツィア系の有力家門であるコルナリオ家の兄弟であった。この二人は、交渉が決裂しかける度に、クレタ総督の依頼をうけてアレクシオスの元を訪れて書簡を渡し、和平協約締結のための条件のすり合わせに尽力することとなった。1299年の和平はこのようにギリシア語や島の中の内情にも通じた仲介者の手を経て、はじめて成立したと言えるのである。

以上の点については、雑誌論文、学会発表において成果として公表した。

(4) コルナリオ家はどのような思惑のもとで、ヴェネツィアとアレクシオス家の関係を

取り持ったのであろうか。この点について、1299年以降のカレルギス家とコルナリオ家の関わりを見ていくと興味深い事実が浮かび上がってくる。

まず、S. マッキーの家系研究によれば、カレルギス家は島内のヴェネツィア系有力家門との間に多くの婚姻関係を結んでいく。

カレルギス家はこうしたヴェネツィア系の人脈を生かして、やがてはヴェネツィア本国へと進出し、アレクシオスの曾孫にあたるゲオルギオス・カレルギスは、キオツジャの海戦(1378-81)においてヴェネツィアに援軍を提供したことが評価されて、ヴェネツィア本国の貴族位を与えられることになった。こうして、ある意味、カレルギス家がヴェネツィア化していくなかで重要な関係を取り結んだのが、コルナリオ家であった。アレクシオスは確認できる6名の子供のうち、娘アグネスをヤコブス・コルナリオに嫁がせ、息子アンドレアスの嫁としてアグネス・コルナリオを迎えており、コルナリオ家とつよい縁戚関係を結びつつあった。1299年の協約のなかには、「反乱者であっても誰でもラテン人と婚姻関係を結ぶ」ことが許される旨が記されており、アレクシオスはこの条項を利用してヴェネツィア系家門とのつながりを強めていったものと思われる。あるいは、コルナリオ家との関係は1299年以前からある可能性も高く、その関係を補強するために1299年の和平協約に結婚に関する条項が入れられたと考えることもできる。ともかくも、和平協約の成立を支えたのは、コルナリオとカレルギスとの間の家の結びつきであったと言える。以上の点の一部は、雑誌論文、学会発表において成果として公表し、なお包括的な成果報告を準備中である。

(5) コルナリオ家とカレルギス家の関係は、実際の社会・経済のなかでも十二分に生かされた。ラテン語の公証人文書のなかには、おそらくはイタリア語での交渉と、ラテン語での文書作成に不慣れであったと思われる、アレクシオスにかわって、アンドレアス・コルナリオが、カンディアに住む他のヴェネツィア系都市市民との間で作成している契約書が残されている。16通の契約書のなかでは、アンドレアスはオジであるアレクシオスにかわって契約書を作成している旨が記されており、両家の縁戚関係が生かされていることが分かる。さらにその内容をみると、アンドレアスはアレクシオスのもつ資金を元手にして、さらにヴェネツィア系住民からの資金をつのりつつ、カンディアの郊外で家畜小屋や、カンディアの中の賃貸物件への投資、カンディアへの穀物運び込み、といった商活動を行っていたことが分かる。こうしたアンドレアスの活動が損金を出したときには、アレクシオスはその賠償にあたっており、アンドレアスはカレルギス家とカンディアの有力

ヴェネツィア系都市民とを経済的に結びつける役割を、自分への見返りが十分にあることを期待したうえで担っていたことが考えられる。

以上の点は、なお未公表であり、包括的な成果報告を準備中である。

(6) カレルギス家とヴェネツィアとの繋がりのなかで、コルナリオ家が有利な立場に立ったことは言うまでもないが、ヴェネツィア中央政府やヴェネツィア系有力者との関係を深めるなかでは、カレルギス家もまた家門としての自らの性格を変化させていったように思われる。それは、ひとつには政治的な側面においてであり、カレルギス家はヴェネツィア寄りの立場と、ミュロポタモスという山間部を代表する立場を使い分けた。したがって、カレルギス家の成員の多くは、正教会の信仰とギリシア人としてのアイデンティティを保持し続けたと思われる。その例としては、1330/31年に作成された、アレクシオスの娘アグネスの遺言書があげられる。おそらくこの時までにはアグネスは夫と別居していたと思われ、居住するミュロポタモスからカンディアに出かけて文書を作成している。その中では、夫であるヤコブス(文書中で「コルナリオ家の某氏」というもってまわった言い方がなされることも、二人の関係を象徴している)とコルナリオ家の人々、ならびにローマ・カトリック教会に対する配慮は見られない。一方で、実家であるカレルギス家やギリシア正教会についての記述が遺言内容のほとんどを占めているのである。こうしたアイデンティティの問題についてはなお検討が必要だが、アレクシオスをはじめとするカレルギス家の人々のなかでは、実利を手に入れるためのヴェネツィア化(ヴェネツィアへの接近、ヴェネツィア家門との婚姻)と、ギリシア正教徒としてのアイデンティティの保持は両立していたのであろう。

こうして、カレルギス家は地域を代表する存在でありかつ、分離したラテン世界(都市圏、ローマ・カトリック優勢、ヴェネツィア系有力者)とギリシア世界(山間部、ギリシア正教、ギリシア語話者)とを繋ぐ存在ともなっていたのである。

以上の点は未公表であり、包括的な成果報告を準備中である。

(7) 宗派が居住空間やアイデンティティの面で分離しつつ、様々な仲介者の介在によって繋がれるという側面は、中近世のクレタ社会史のあちらこちらに見られる現象である。ヴェネツィア側からすれば、当初クレタ支配の核になると思われたヴェネツィア系の有力者は実際にはその役を十分には果たさず、ユダヤ人やギリシア人を含む多様な人々の関係性のなかで、島の支配が完結し得たことを示している。

この点についての見取り図について、雑誌

論文 ならびに学会発表の において示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

服部 良久、朝治 啓三、松本 涼、高田 良太、藤井 真生、中世ヨーロッパにおける政治的コミュニケーションと秩序—境界地域から—、西洋史学、査読有、No. 251、2014年、pp.184-196

高田 良太、港湾都市カンディアからみた中世後期の東地中海、歴史学研究、査読無、No. 911、2013年、pp.160-168

〔学会発表〕(計 3 件)

高田 良太、中世地中海の遺言書—14世紀クレタの事例から—、第86回チョーサー研究会、2014年1月25日、駒澤大学

高田 良太、港湾都市カンディアからみた中世後期の東地中海、歴史学研究会大会、2013年5月26日、一橋大学

高田 良太、13, 14世紀クレタにおけるヴェネツィア支配とギリシア人—「反乱」時代の秩序形成—、第63回西洋史学会大会、2013年5月12日、京都大学

高田 良太、中世クレタにおける小さな「フロンティア」都市カンディアの共生社会、第61回早稲田大学西洋史研究会大会、2012年12月15日、早稲田大学

〔図書〕(計 1 件)

高田 良太 他、昭和堂、ビザンツ—交流と共生の千年帝国—、2013、288+xvii(うち、申請者は pp. 205-231, 278-285 を担当)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://gyoseki-komazawa-u.jp/kzuhp/KgApp?kyoinId=ymdggegyggo>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 良太(TAKADA, Ryota)

駒澤大学・文学部・講師

研究者番号：80632067